

懸賞論文第一等當選

生命躍動の歡喜

小川久雄

すべての客觀的問題から離れて眞實に自分自身の生活といふことを思ふとき、私達はたゞ生の問題によつかかるのみである。

多くの人は自分が生きてゐるといふことに就ては、未だ嘗て疑つて見たことすらない、生れた時から自分はいつも生きてゐるといふ自覺のもとに生活して來てゐるのである。

何故に生きてゐるのか、そんなことは斯うした人達には問題にならない、たゞ生きて居るから生きてゐるのだ。そうした漫然たる理由の下にたゞ生きてゐるといふ氣持だけを保持してゐるのである。

強いてその理由を求むる時、人々は斯う答へる。現に我々は斯うして働いてゐるではないか。家の爲を思つたり國のためを思つたり或は名譽の爲子孫の爲を考へたりいろ／＼社會の問題に携はつて思慮畫策をめぐらしてゐる。これ生きてゐる證據ではないかと。

なるほど、さう聞いてみれば、一應そこに何等の疑もない様であるが、然し私達には、さうした簡單な答で

満足することは出来ぬ。

もつと深いあるものが得たい。それは私達の衷心からそのことを裏切らうとするのである。家のためとか國の爲とか社會の爲とかさういふ爲といふ言葉が果してどれだけ私達の生の内容を價值づけてゐるか。何故に人は爲といふことの中に生きねばならないのか、爲が生でなく、思慮し行爲することが生であるといふならば思慮行爲は如何なる思慮行爲でも、そはすべて生といひ得るか。よしそれがすべて生であるとしたところで私達の衷心には生に對する選擇の要求がある。或生を捨て、或生にのみ生きようとする欲求がある。この欲求が強くなれば強くなるほど、生に對する不滿の情も亦痛切に表はれて来る。

私達は生活しつゝ尙生きてゐるといふことを感ずることすら出来ないほど、生の問題に苦められる様になる。生きてゐると言ひながら全く生を失つた状態に苦むのである。茲に至つては、生といふことは、たゞ思慮行爲だけでは意義がない。それよりももつと以上に生そのものの内容として内面的に生を意義づける何物か、私達の自覺のうちに獲得せられなければ満足することが出来ない。

國の爲とか社會の爲とかいふけれど、そうしたすべての爲といふことも、押しつめて考へてみれば、すべて自己の生に對する自覺内容として始めて意義あるものであつて、自己の生に對する自覺を離れては畢竟何等の價值も見出すことはできないものである。

人生のすべては自覺の光りに照されて始めてその意義を與へられるものである。自己の生に對する自覺が深くなればなるほど人生の價值は高められる。社會の爲に盡すのも、それが直に自己の生きる眞實の道でな

いとしたりば、如何にしてそれが自己の生と言ひ得られやうか。私達が職業の爲に働いてゐるのも、すべてそれが眞實の自己の生きる道であつてこそ、始めて私の生といひ得られるのである。自己を離れて一切は虚無である。私達は且らく人生のすべての問題から離れて自己の内、生の上に思ひを凝して靜かに自己生命のまことの聲を聴きとらなくてはならない。

x

すべて人生に忠實なる人々よ。自己に忠實なるは人生に忠實なる所以の道であることを忘れざれ。

自己を愛することを知らずして、果して眞に人生を愛することが出来るであらうか。私達にとりて人生とは畢竟客観化されたる自己の生の内容に外ならぬ。外界に投射されたる自己そのものが即ち私達の人生である。だから、私達が人生を愛するは即ち私達の生そのものを愛することであらねばならぬ。人生の改造とは自己の生の内容を新たにすることを措いて外に意味はあり得ない。私達が人生の爲に盡すといふも畢竟自己の生の内容の爲に努力することの外に意味はない。

であるから生の意義に於て、その價値の標準は、外部に求めらるべきものでなくて、常に内部に所有せらるべきものであることを信ずるのである。私達にとりてはこの内的價値の標準が即ち人生の價値を定める根本原理である。言葉を換へていへば、私の内生活をして意義あらしめるものが、即ち人生全体の意義を定むるものである。

更に換言すれば自己をしてまことの自己ならしむる、眞生命の光に裏付けらるゝことによりて始めて人生はその意義を表はすのである。

恰かも太陽の光が萬象に映する色彩によりて、自己自らを實現し、萬象はまたその光の色彩を反映することによりて、自己の存在を現實ならしむるが如く、私達の生命は、人生のすべての形式を借りて、自己自らの生を實現すると共に、人生の總てはまた生命の表現として始めてそれが人生たる價値を得るのである。光なくしては世は永遠の暗であるが如く、生命なくしては人生は畢竟無意義である。

されば、茲に一つの問題が起るのである。

自己の内生は果していかなる生命によりて統一されつゝあるか。自己の内生に現はれたる自己の生命は何であるか。自己はいかなる生命によりて生きつゝあるか。人生の凡てを意氣あらしむべき眞實の生命は如何自己にとりてたゞ一つの眞實なる生命、そは如何なるものであつて、また如何にして實現せらるべきものであるか。一言にせば、眞の意味に於て、私達は如何に生くべきかといふ問題である。この問題は最も重大問題である。

この問題を失ふ時生の意義は空しくなり、私達の生は滅びて了ふのである。生命の叫びさへ感じ得ないほど麻痺したる魂に、眞實に生のあらう等がない。かゝる魂の辿り行く道はすべて虚偽の道である。その行爲のいかに立派にその聲のいかに力強くあるとも、かゝる魂により説かれたるものはたとひそれが道徳であつても宗教であつても、そこには何等の權威もあり得ない。すべて是等のものは内容の眞實を缺いた皮相のみのものに過ぎない。

人生に於て、あらゆる眞實は生命の眞實である。私達は常に内省によりて生命の眞實に生きることを怠つてならないのである。

私たちは誰でも生きてゐるといふ。

×

石や瓦のやうに、單にここにありかしこにありといはるべきものでなくて、魂によりて生活しつゝあるものである。即ち單なる存在でなくて生存せるものである。

水は絶えず流れてゐる。けれど私達は水を生きてゐるとはいはない。雲は常に動いてゐる。けれど雲が生きてゐるとは誰も思はない。植物は或は生きてゐるやうに思はれるかも知れぬが、私たちはまだ植物が完全に生きてゐるものと語る譯には行かない。それは植物に對しては私達はそこに自己意識を認むることができないからである。

生きてゐるといふことの意味には、自己意識の存在が必要である。だがそれだけではまだ足りない。

小鳥は腹一杯に歌ふてゐる。獸は思ふがままに駆け廻つてゐる。私はこれ等のものに對して、眞に羨ましく思ふことがある。私も小鳥のやうに心の底から歌つてみたい。獸のやうに心のまゝに行動してみたい。けれど私にはそれができない、私には種々の考があつて、それを邪魔するからである。何故私達はかやうに様々なことを考へねばならぬのであらうか。人目を氣づかつたり、自分の體裁を思つたり、役にもたゞぬさまゝくな考のために、いつまでも／＼囚へられて苦しまねばならぬといふのは何といふ惨めなことであらう。世の中にこんな馬鹿げた苦しみをしてゐるものは獨り人間のみである。人間のみが他のすべての生物と違つて思考の能力を所有してゐる。そしてその能力のために苦闘せなければならぬのである。

舊約聖書によれば、人は始め神によりて造られエデンの樂園におかれてあつたが、惡魔の蛇に誘惑せられて

智慧の樹の實を食ふたが爲に遂に樂園を追はれて墮落の苦境に陥つたのだといふ。

是は或意味に於て眞實を語つてゐる。

私達に若し思考するといふことがなかつたなら、私達は斯うまで苦しまなくともよい譯である。けれど私達は凡てのことを考へなければならぬやうになつてゐる。單に外界の事物に對してばかりでなく、自己の内面に關しても私達は考へずにゐられない。

そしてその考へられたことは大概は私自身に對して何等かの束縛を強ふるのである。私は全然考へずにして行くことが出来たらどんなに幸福であらうと思ふことがある。

私は斯うした氣持から鳥や獸を羨ましく思ふのである。

けれども私の思考は直に是を否定する。私は矢張り思考を離れることはできない。

私は鳥や獸を羨ましく思ふ、といつて鳥や獸になりたいとは思はない。私は矢張り苦しくとも、思考の能力を失ひたくない。たとひ思考によりて苦むことはあつても、思考そのものを悪いものだととは思はない。悪いどころか思考こそ人間にとり唯一の大切な能力であると思ふのである。

人は單に外的の刺激に對して、感覺作用があるといふだけに於て價値があるのではない。更にそれ以上にそれ等の刺激や感覺を制御し統一する作用に於て生の價値を有してゐるのである。

人にとりて生きるといふことは人生の總てを自己によりて統御することに外ならない。換言せば總てのものの上に自己自身を實現するといふことである。

私達は生れて六七歳までの間は、ただ外界の刺激に生きてゐるだけであるが、これ等の刺激はいつか私達

の内部に自我意識を目醒めしめるのである。こゝに始めて人生といふことが始まるのである。かくて目醒めたる自我意識は更に人生のあらゆる刺激に對して單に受動的の位置に居ることが出來ずして自己みづからによりてこれら凡てを制御し統一せんとする能動的の態度をとるのである。この能動的態度の上に思考の作用が起るのである。故に思考は、魂が人生のさまざまの事件に對して是を自己みづからのものたらしめそれによりて自己みづからを實現せんとする作用に外ならぬのである。

けれど既に外的の刺激によりて目醒されて外的統一に向つて動き出した私達の魂は、遂に自己みづからを反省することを忘れて、ひたすらに外的のみに思考を注ぐやうになつた。かくていつか生活の根本義から離れた私達の魂は、却つて外的人生のために束縛せられて、自己のための思考によつて、却つて自己みづからを滅ぼすやうな、矛盾せる生活に墮つて了つたのである。智慧の樹の果を食つたことが悪魔の誘惑でなかつたけれども智慧の樹の果の爲に墮落したことが悪魔の誘惑であつたのである。けれど私達はいつまでも墮落の淵に沈んでゐることはできない。

墮落の苦惱は遂に私たちの魂に反省を與へて、再び自己みづからの問題に目醒めしめる。こゝに生の問題は、更に新なる問題として私達の前に提供せられる。眞の生活はこれから始まるのである。

×  
自己とは何ぞや？

釋尊は無我説を主張して、人は五蘊假和合のものに過ぎぬと教へた。けれど自我が全然無いといふ意味ではなかつた。五蘊和合の組織作用の外に、固定せる我がある。と執着せる妄見を打破せられたのである。

凡人の考ふる有といふことは時間的に不變に固定せる存在を意味するからして、斯くの如き意味の存在は事實に違反せるたゞ空想的な概念のみのものであつて、眞の存在は變化流動の作用として現はれたる現象そのものうちに認めらるべきものと示されたのである。

人は飽くまでも事實に生きなければならぬ。私たちは事實を概念的に見ることによりて事實の眞を失ふとともに自己みづから自殺する、すべての概念は事實を示すものではあるけれども、事實そのものは概念とは違つてゐる。概念は事實を固定的に寫したものであるからして事實の眞髓に觸れようと思へば、どうしても概念だけにどまらつてゐてはならない。釋尊の排斥せられたのは自我の概念である。概念的の自我である。

釋尊は一般の人々の考へてゐるやうな、常一主宰の自我を排して、現に生活せる個人について、これを分析的に五蘊、十二處、十八界の教を説かれた。

五蘊とは色、受、行、識であつて、色とは物質すべてを含む即ち吾人の身体はこれに屬す。受は感覺である。想は思想意識である。行は精神的または肉體的のすべての行爲である。識は即ち一切の精神作用靈的作用である。人は即ちこの五種の作用の結合統一せるところに名づけられたものであつて、この他に別に靈魂といふやうな固定した特殊の存在物があるのではない。自我とは畢竟この統一に外ならぬといふのが釋尊初期の説法であつた。

然らばその統一作用は如何なる形式によりて表はれてゐるかといふに、それは即ち認識の作用である。認識とは、客觀的事象が主觀的作用によりて識別せられることで、其を明にしたのに十二處十八界の説明がある。



十二處とは眼、耳、鼻、舌、身、意の六根と色、聲、香、味、觸、法の六境とである。

十八界とは上の十二處に眼、耳、鼻、舌、身、意の六識を加へたものである。この中、根と識とは主觀で境は即ち客觀である。單に主觀、客觀の分立を示したものが十二處であつて、其を更に詳細にしたのが十八界である。十八界によれば、私達の生活は識が根によつて境を分別遠慮することによりて營まれて行くものである。

斯きの如き作用が常恒に絶えまなく統一的に流動しつゝ進み行くところに自我の觀念は生じたのである。是は極めて簡明素樸な教であるが釋尊の眞意はこゝに明らかに了解することを得るのである。

x

近代著しく各方面に覺醒し來つたのは自我の觀念である。今迄永く客觀にのみ囚へられてゐた自我が一時に覺醒して、あらゆる客觀的束縛から脱して、自己みづからに生きんとする思潮が表はれて來たのは人類生活の向上進展にとつて最も祝福すべきことだと思ふ。

されど、折角覺醒せる自我も、實に自我の眞生命に觸れて、眞の意味に於ける復活をなし遂げることに向つての努力が缺けてゐたならば、恐らくは前にもまして、一層悲惨なる自我の死滅を來すかも知れぬ。若しさうならば、人類の生命にとりては最後である。

見よ！今や生命なき總てのものは破壊されつゝある。宗教であれ道徳であれ、すべて世界に現はれたる形あるもので生命のないものは悉く破壊し盡さねば己まぬ状態である。かくて人々は總てのものゝ上に眞實の生命を求めて喘ぎつゝあるのである。

されど反省せよ！私達が眞に求めつゝあるものは外的生命ではない。一切のものゝ上に見出さるゝ生命ではない。私達の求め喘いでゐるものは私自身の生命である。社會の生命でも、道德の生命でも、宗教の生命でも、文藝の生命でもない。自己みづからの眞實の生命である。

私達は自己の生命を求むることにより眞の社會を欲し、眞の道德を欲し、眞の宗教を欲し、眞の藝術を欲しつゝあるのである。

私達の要求は外に向けらるべきではなくて内に向けらるべきである。私達は先づ自己そのものから反省してかからなくてはならない。私達の自己と呼んでゐるものは抑も何ものであるか、私達は果して眞の自己を知つてゐるのであらうか。是は今の私達にとり非常に重大な問題である。輕輕に看過すべきではない。

私達は覺醒の眼を先づこの點に向けなくてはならない、斯の如き重大問題を輕々しく看過し來つたが爲に私達は眞に生きることができなかつたのではあるまいか。客觀的束縛から脱れんとして戰ふのはよい。生命なきものを破壊するのもよい。けれど戰鬪や破壊が人生の眞の生きる道ではない。私達の瞬時も忘れてならないのは建設の努力である。創造の努力である。

自己の考察の足りない人々は、自己を聞けば直ちに自分の本能や慾情等を肯定しようとする、而して是等のものが自己の内に本有的に存在するといふ事實から事實は直に眞なりといふ公理の下に、放縱なるすべての行爲を是認しようとする。かくすることによりて彼等は、折角目覺めたる自我の眞の要求を捨て、再び無自覺の生活の内に自我の魂を滅ぼして了ふのである。この點は大いに注意を要するのである。内的要求のない生活は眞の生活ではない。單に事實に生きるといふことだけが生の本義ではない。生といふことの上には

常に根本的統一の力が活はたらいてゐなければならぬ。この根本的統一力が即ち私たちの自我である。眞實自我の生命である。

本能や慾情の如きものも、固より私達のうちに起つた事實には相違ないが、而しそれは何れも部分的に働いてゐる或一種の内的活動に過ぎない。是等の外にもまだ澤山な内的活動が存在する。そしてそれらのものは、何れも客觀的刺激に應じて起つたものであつて謂はゞ外的のものである。私達にはもつと深いもつと根本的な自我それ自らの爲の要求が働いてゐなければならぬ。私たちの眞の自我はこの要求の内に認めらるべきである。

譬へば私たちにどつて、菓子が食いたいといふのも事實であれば、又胃を害するから食はない方がよいと思ふのも事實である。思ふ儘に快樂に耽りたいと望むのも事實である。がそういふ望みを卑しんで苦しいけれどもつと眞實な生を辿りたいと願ふのも事實である。

自我の内面にはかうした事實が種々あるがそれらの事實を凡て同時に肯定することはできぬ。何となればそれらの事實は實際互に矛盾し格闘するからである。

私たちは私たちの生活を可能ならしむる爲には、これらの事實のうちで、一を否定して一を肯定しなければならぬ。私の生活は私の内なる多くの事實を選択取捨することによりて營まれる。私の自己は寧ろこの選擇取捨のうちにあるといひ得られるのである。

たとひそれが私の内部に起つた事實であるにもせよ、單に事實であるといふだけで、それが私自身ではあり得ない。それらの事實は（それは私の外部に起つた事實についても同じく言ひ得ることであるが）私により

て選擇取捨さるゝことにより、始めて私自身となる。肯定せられなければ自己でないといふわけはない。否定されたものでも、それが自己によりて否定されたといふことに於いて、私の自己であり得る。自己は肯定のみから形成せられるものでなくて、否定によりても形成せられているのである。肯定せられたものは肯定の相すがたに於いて、否定せられたものは否定の形に於いて自己である。自己は肯定と否定の二つの相を有す。この二つの相の上に自己は實現してゐるのである。實際私達は、何を肯定し何を否定するかに於て自分みづからを實現する。肯定され否定されるところの事實そのものが、直に自己ではなくして自己はこれらの事實の上に表現さるべきものである。

故に私達の内<sup>うち</sup>に起る種々なる事實は、それがそのまゝ自己ではなくしてそれによりて自己が實現するため材料に過ぎない。私達はこれらの事實を方便として、自己みづからを實現することによりて自己の生を創造するのである。すべてが自己實現、自己創造の材料となつたといふ點に於いて、是等の事實は自己に統一せられたといひ得るのである。生の統一とは畢竟かくの如き意味での自己實現に外ならぬのである。

生活上に於ける苦惱は、多くの場合生の分裂から生ずる。

私達は常に生の根本的統一力、即ち眞の意味に於ける自我そのもの、自覺を有せざるがために、互に矛盾せるさまゝの内の事實に攪亂せられて生の不統一に苦しむのである。自己が實現すべき生命力を有せずして事實の奴隷となつたとき、自己は遂に自己たることを得ないで苦しむ。そこに眞實の生はあり得ない。自己なき苦惱は、眞の意味に於て生の苦惱ではない。生の苦惱は自己實現の苦惱であらねばならぬ。自己實現の苦惱は生の統一に對する苦惱である。

故に、眞に生の統一に惱む人は、常に眞の自己を把持せんことを欲する。而して眞の自己は、實現すべき生命力の自覺の内にもみ見出さるべきものであるからして、眞の自己を求むるといふことは畢竟するところ生命力の要求に外ならないのである。

世の凡人はただ目的のみを價值あるものと思つてゐるが、その目的に達するまでの過程に價值を認むべきである以上決して最後を急いでではない。目的を忘れるといふことは悪いけれど、目的を失はない限り、それに到るまでの求道の生活も、また最尊至上のものであることを忘れてはならない。それは眞の意味に於ての宗教的眞活である。

私たちはたとひ一生の間に、眞生命の自我に觸れずして終つたにしても、ただその眞生命に向つて進んだといふ點に於て、立派に生の價值を味ふことができるのである。

x

學問上から難かしく言つたなら、そこに種々な説もあるであらう。しかし要するに信仰とは上述の如き生命の自覺に外ならないのである、それは即ち靈魂の覺醒であり、自己が自己の本質に生き得ることである。

久遠の自我の實在に觸れることである。

本然の自我の復活であり純眞なる靈魂の廻向であり、生の救濟である。

茲に於て私は尊き自我の燦然たる光りに觸るゝところの法悦を以て生命躍動の歡喜とこそ唱うるのである。